

# 関係の親密さと地位関係が自己卑下呈示動機に及ぼす影響

上 拾 石 直 人 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

有 倉 巳 幸 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

稲 垣 勉 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

Effects on motivation for self-derogative presentation depending on the closeness of the relationship and the social status of the relationship

KAMIJIKOKU Naoto, YUKURA Miyuki and INAGAKI Tsutomu

キーワード：自己卑下呈示、自己卑下呈示動機、関係の親密さ、地位関係

## 1. 目的

日本における自己卑下呈示は、印象操作に基づく「謙遜」の現れや他者と良好な関係性を維持したいという動機に基づいていることが指摘されてきた(吉田・浦・黒川, 2004)。例えば福島(1996)は、人と人が根本的に結びついている相互協調的な日本文化(Markus & Kitayama, 1991)では、他者との関係性の崩壊が自己にとって大きな打撃となるため、関係をないがしろにするような自己の優位性の表明が避けられ、人々が自己卑下に向かうと述べている。しかしながら、自己卑下呈示には関係性の維持だけでなく様々な動機が存在することが指摘されている。吉田・浦・黒川(2004)は、自己卑下呈示をする際に、相手からの良い評価がフィードバックされることを期待する間接的な自己高揚動機が存在を指摘している。またその結果から、自己卑下呈示の際に関係志向的な動機を意識しながらも、自己高揚的な動機をも有している可能性があることを示唆している。このように自己卑下呈示の動機は複数存在することが考えられる。

吉田他(2004)は、自己卑下呈示の動機には何があるかを測定している。その結果、自己卑下呈示動機は、「人並み以上に優れていると思いたい」などの項目からなる自己高揚動機と「相手にそんなことないよ、と言って欲しい」などの項目からなる自己奉仕的反応希求動機、「自分に親しみを感じてほしい」などの項目からなる関係希求動機、「話題を提供したい」などの項目からなる話題提供動機の4つに分けられた。また、抽出された自己卑下呈示動機の頻度の差を検討した結果、関係希求動機に基づく自己卑下呈示がもっとも多く行われており、次に自己奉仕的反応希求動機に基づく自己卑下呈示が多く行われていた。この結果から、自己卑下呈示は関係維持に動機づけられた関係希求動機による呈示が最も多く行われているが、自己奉仕的な動機に基づく自己卑下呈示もわずかなが行われている可能性が示された。しかしながら、この研究では自己卑下呈示をされる被呈示者は「他の人」と表記され、具体的に限定されておらず、自己卑下呈示の受け手を一般化された他者として扱っている。その点に関連して、村上・石黒(2007)は具体的な他者との関係性が自己卑下の

自己呈示に及ぼす効果について検討した。その結果、配偶者や親友、同僚・仕事関係では謙遜行動が生じにくく、知人や近所の人では謙遜行動が生じやすかった。このことから、具体的な他者との関係は、自己卑下呈示に一定の影響を及ぼすことが考えられる。

村上・石黒(2007)の知見から、具体的な他者を想定すると、関係性によって謙遜行動の生起率に違いがあることがわかる。つまり、一般的な他者を想定した吉田他(2004)では、回答者は様々な他者を想定した可能性があり、それらが結果に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。そこで、本研究では他者に対する親密感を操作することで、他者との関係を限定する。

また、村上・石黒(2007)において地位関係によって謙遜行動の生起に違いがあることが示された。村上・石黒(2007)は、親友ではない関係性の場合には謙遜行動の生起率に差はなかったのに対して、親友の場合は、自分が目上である場合は謙遜行動の生起率は高く、自分が目下の場合には謙遜行動が生じにくいことを示した。

自己卑下呈示については、以上の結果が示されているが、自己卑下呈示の動機と地位関係を関連づけた研究は見られない。自己卑下呈示の動機と地位関係に関連が見られれば、自己卑下呈示の研究をする際に、地位関係を考慮することでより明確に自己卑下呈示の性質を見ることができよう。そこで本研究は、関係の親密さに加えて、地位関係が自己卑下呈示動機に及ぼす影響を検討することを目的とする。

しかし、村上・石黒(2007)は、地位関係を目上と目下と表現し主に社会人を対象に調査しているが、大学生に対して目上と目下と表現すると年齢による上下関係や役割的な上下関係が含まれ、関係の親密さと同時に調査するには適切ではないと考えられる。そのため、本研究では目上・目下に替えて、主観的な相手との「説得力」の優劣で地位関係を測定する。仮説は以下のとおりである。

仮説1：関係の親密さが高い場合の方が低い場合より関係希求動機は高くなるだろう。

仮説2：関係の親密さが高い場合より低い場合の方が話題提供動機は高くなるだろう。

仮説3：関係の親密さが高い場合より低い場合の方が自己高揚動機は高くなるだろう。

仮説4：関係の親密さが高い場合の方が低い場合よりも自己奉仕的反応希求動機は高くなるだろう。

また、地位関係については先行研究がないため、探索的に検討する。

## 2. 予備調査

予備調査では、具体的な人物の想起をする際に、関係の親密さを操作することができるか、また地位関係の操作ができるかを確認することを目的として行った。

### 2. 1. 方法

**調査対象者** 大学生 148 名(男性 76 名, 女性 72 名), 平均年齢 20.1 歳( $SD=0.9$ )を対象とした。

**材料** 本研究では、以下の尺度を用いた。

**フェイスシート** 年齢, 学部, 性別を記入してもらった。

**具体的な人物の想起** リード文において知人, 友人, 親友のいずれかを想起するように指示し, 3 つをランダムに割り当てた。

**心理的距離** 心理的距離の測定は天貝(1996)が用いている 9.5 cmの線分を示し心理的距離を測定する方法をとった。0.5 cmごとに区切り、20 段階で測定した。

**地位関係** 思い浮かべた他者と意見が対立した際の対応で説得力の優劣を測定した。対応は「自分の意見を貫く」「対等に意見を主張する」「相手の意見を受け入れる」の中から選択してもらった。また、相手と自分との位置関係を、相手を中心に配置した図に印をつけて表した。

## 2. 2. 結果および考察

関係の親密さについて、1 要因 3 水準の分散分析を行ったところ、地位関係の有意な主効果があった( $F(2, 128) = 17.76, p < .001, \epsilon^2 = .20$ )。そこで、多重比較を行ったところ、知人と友人間、知人と親友間には 1%水準で有意な差があったが、友人と親友間には差がみられなかった。

148 名中 117 名が対等な友人を想起しており、「自分の意見を貫く」を選択したのは 6 名のみであった。村上・石黒(2007)のように、人物を想起するよう求めたのちその人物との関係を選択する方法ではデータに著しい偏りが出ると考えられる。また、相手と自分の位置関係のチェックにおいて 104 名が説得力があると考えていると自分の位置を上置き、説得力が対等であると考えていると相手と対等の位置に置き、説得力が下であると考えていると自分を相手よりも下の位置に置いていた。

今回の予備調査において、友人と親友間には地位関係の差がみられなかった。つまり、人物を想起させた後にその人物との関係を選択すると、友人と親友には関係の親密さに差が出ないことを示している。そのため、地位関係においては、本調査では関係の親密さは高群と低群に分けて操作することとした。また、人物の想起においては、シナリオによって想起する人物を操作した。(付録参照)

## 3. 本調査

### 3. 1. 方法

**調査対象者** 大学生 177 名に回答を依頼し、このうち回答に記入漏れのあった 4 名を除き 173 名(男性 64 名、女性 109 名)を分析対象にした。平均年齢は 20.2 歳( $SD = 2.3$ )であった。

#### 質問紙

**フェイスシート** 年齢、学部、性別の記入を求めた。

**シナリオ** 関係の親密さの高・低、説得力の優劣で地位の上・対等・下を操作した。予備調査をもとに、関係の親密さの 2 水準と地位の 3 水準の 6 パターンのシナリオを作成し、ランダムで割り当て、友人を想定してもらった。

**自己卑下呈示動機** 動機としては吉田他(2004)において用いられた自己卑下呈示動機測定項目を用いた。「全くない(1)」から「かなり多い(5)」の 5 件法で測定した。

**関係親密度** 山中(1994)において、二者関係の親密さの基準として用いられた尺度を使用した。親密度の操作チェックとして用い、3 項目「全く好感が持てない(1)～非常に好感が持てる(7)」、「非常に浅くかかわっている(1)～非常に深くかかわっている(7)」、「顔や名前を知っている程度の友人

(1)～最も親しい友人(7)」の7件法で測定した。

**地位関係の操作チェック** 想定してもらった友人が「目上」「対等」「目下」のどれに一番近いかを選ぶよう求めた。

### 3. 2. 結果

山中(1994)の関係親密度について、関係の親密さ(高・低)によって差があるか否かを調べるため、対応のない  $t$  検定を行ったところ、関係の親密さの高・低で差があり ( $t(173)=9.32, p<.01, g=1.42$ )、関係の親密さが高い群のほうが関係親密度が高くなっていた。したがって、関係の親密さの操作は有効であったと判断した。

地位関係について、操作チェックにおいて173名中147名が相手との関係を対等であると回答していた。また、相手を目上と操作する群では56名中9名、相手を目下と操作する群では58名中5名しか操作できていなかった。

自己卑下呈示動機尺度については、先行研究と同様の項目で下位尺度を構成し、内的整合性を検討した。下位尺度はそれぞれ、「自分に親しみを感じてほしい」「自分が相手に親しみを持っていることを示したい」などの項目からなる「関係希求動機」( $\alpha=.83$ )、「本当は自分は優れているんだという気分になりたい」「人並み以上に優れていると思いたい」などの項目からなる「自己高揚動機」( $\alpha=.79$ )、「相手にそんなことないよ、と言って欲しい」「私が言ったことについて、慰めて欲しい」などの項目からなる「自己奉仕的反応希求動機」( $\alpha=.72$ )、「話題を提供したい」「その場の雰囲気を和ませたい」などの項目からなる「話題提供動機」( $\alpha=.65$ )であった。

Table1 各動機の相関係数と記述統計量

	2	3	4	平均	標準偏差
1. 関係希求動機	.63**	.32**	.43**	3.73	.84
2. 話題提供動機	-	.29**	.38**	3.33	.74
3. 自己高揚動機		-	.47**	2.76	.81
4. 自己奉仕的反応希求動機			-	3.1	.79

\*\*  $p<.01$

仮説を検討するため下位尺度の得点を従属変数とし、関係の親密さ(2: 高・低)×地位関係(3: 上・対等・下)を独立変数とした2要因参加者間分散分析を行った。仮説1を検討するため、関係希求動機について分散分析を行った結果、いずれの要因の主効果も交互作用も効果がみられなかった( $n.s.$ )。

仮説2を検討するため話題提供動機について分散分析を行った。その結果いずれの要因の主効果も交互作用も効果がみられなかった( $n.s.$ )。

仮説3を検討するため、自己高揚動機について分散分析を行った。その結果、いずれの要因の主効果も交互作用も効果がみられなかった( $n.s.$ )。

仮説4を検討するため、自己奉仕的反応希求動機について分散分析を行った。その結果、いずれの要因の主効果も交互作用も効果がみられなかった( $n.s.$ )。

Table2 各条件ごとの平均値と標準偏差

	高親密			低親密		
	目上	対等	目下	目上	対等	目下
関係希求動機	3.88 (0.91)	3.69 (0.95)	3.83 (0.96)	3.64 (1.13)	3.70 (1.06)	3.60 (1.11)
話題提供動機	3.25 (1.11)	3.45 (1.09)	3.38(0.99)	3.26 (1.18)	3.34 (1.14)	3.29 (1.15)
自己高揚動機	2.70 (1.02)	2.74 (1.04)	2.79 (0.98)	2.85 (1.17)	2.73 (1.01)	2.78 (1.07)
自己奉仕的反応希求動機	3.29 (0.96)	3.17 (0.96)	3.08 (1.02)	3.06 (1.26)	2.89 (1.04)	3.14 (1.12)

#### 4. 考察

本研究では関係の親密さと地位関係が自己卑下呈示動機にどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果、いずれの要因の主効果も交互作用も効果がみられず、仮説はすべて支持されなかった。この理由としては、以下のものが考えられる。

まずは、回答者が本研究で想定した関係の親密さや地位関係とは違う観点によって自己卑下呈示を行う動機を規定している可能性が考えられる。吉田・長谷川・浦(2004)は、呈示者と相手が自己卑下呈示規範を共有している場合であっても、相手に対する親密感が伴わなければ、抑うつ傾向の抑制が生じないことを示し、親密さが感じられない相手と自己卑下呈示規範を共有することは抑うつを高めることを示した。このことから、本研究では検討していない自己卑下呈示規範の共有が影響している可能性がある。今後は、自己卑下呈示動機と自己卑下呈示規範内在化の関連を検討するなど、自己卑下呈示規範内在化も視野に入れて検討する必要があると考えられる。

また、今回の調査では普段自己卑下呈示をどの程度しているかという点は調査していない。自己卑下呈示をする頻度には個人差が予想される。しかしながら、今回行った調査は自己卑下呈示を行うことが前提になっている。自己卑下呈示を全く行わない人がこの調査に回答すると、すべての項目において全くないと答えることになる。そのため、頻度が統制されていないことで今回の結果に影響した可能性も考えられる。今後は、普段自己卑下呈示をどの程度行っているかを確認する項目を入れるなど、自己卑下呈示の頻度も統制する必要があるだろう。

本研究の課題としては、シナリオの操作が十分ではなかった点が挙げられる。地位関係の操作のシナリオが回答者に理解しにくいものであった可能性や、シナリオだけでは操作が不十分であった可能性などが考えられる。本研究では、友人関係における地位関係を説得力の優劣によって操作しようと試みたが、今回用いたシナリオは回答者にとって地位関係と結びつきにくいものであった可能性がある。今後は、地位関係の操作を回答者が十分理解できるように検討する必要があるだろう。

#### 5. 要約

これまでの自己卑下呈示の研究において、謙遜による印象操作や関係の維持だけでなく自己奉仕的な動機も存在することが示唆されていることから、自己卑下呈示の動機は複数存在することが考えられる。また、自己卑下呈示動機を扱った研究は、自己卑下呈示の対象となる受け手を一般化された他者として扱っていた。一般化された他者を用いた研究では、回答者は様々な他者を想定した可能性があり、それらが結果に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。そこで本研究は、関

係の親密さと地位関係が自己卑下呈示動機に及ぼす影響を検討することを目的とした。大学生を対象に、シナリオによって関係の親密さの高・低、相手が目上・対等・目下の6パターンに群分けし、自己卑下呈示動機尺度を測定する質問紙調査を行った。その結果、先行研究と同様、関係希求動機、自己奉仕的反応希求動機、自己高揚動機、話題提供動機という4つの動機について分析を行ったが、関係の親密さと地位関係は、すべての動機において関係がみられなかった。

その理由として自己卑下呈示規範内在化の共有が影響している可能性や、自己卑下呈示の頻度の差、シナリオ操作の不備が挙げられる。

## 引用文献

- 天貝由美子 (1996). 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29, 130-134.
- 福島 治 (1996). 自己呈示——自己概念と社会的状況の相互作用——東北大学博士学位論文(未公開).
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 村上史郎・石黒 格 (2005). 謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果 社会心理学研究, 21, 1-11.
- 村上史郎・石黒 格 (2007). 関係性が自己卑下の自己呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, 23, 33-44.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.
- 吉田綾乃・長谷川孝治・浦 光博 (2004). 自己卑下呈示規範の共有とパートナーへの親密感が精神的健康に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミクス学会第51回大会発表論文集, 242-243.
- 吉田綾乃・浦 光博・黒川正流 (2004). 日本人の自己卑下呈示に関する研究——他者反応に注目して——社会心理学研究, 20, 144-151.

## 付録

### シナリオ例

あなたには授業等でたまに会う程度のあまり親密でない友人がいます。その友人とはいつも意見が食い違います。意見が食い違った際、あなたは自分の意見を友人に納得させます。

## 謝辞

本論文は第一著者が第二著者の指導の下、鹿児島大学教育学部心理学専修に平成29年度卒業論文として執筆・提出したものをもとに、第三著者の指導を受けて構成したものです。調査にご協力いただいた大学生の皆様に心からお礼申し上げます。